

大丈夫だそうです。磯部温泉での集まりのとき、藤巻さんに会いましたが、藤巻弥栄病院長さんの息子さんであることが一目で分かりました。先生には大変お世話になったことを話しますと、父の話が聞けたと言つてとても喜んでくださいました。

五十年前の悪夢の思い出のためか、思うように筆が進みませんでした。

二度とこのような悲劇を繰り返さないために、私の書いたこの手記が少しでも役に立てばと願うばかりです。

敗戦と女の涙

東京都 林 田 佳 子

一 あこがれの満州へ

勤労奉仕隊員として、夢にまで見たあこがれの満州行が実現できたのは、戦火たけなわとなった昭和十九(一九四四)年三月の末でした。

親友三人と共に群馬県からの参加でしたが、一週間分ぐらいの食糧として、おにぎりを焼いたり油で揚げたりした物を作り、リュックサックに詰め込み背負いました。

内田場長に引率されて、多くの人々に見送られ歓呼の声の響きわたる中を、富岡駅から出発しました。車内は軍の命令で、途中車窓から外の景色が見られないように木製のブラインドが下ろされていました。

新潟港に着きそこで一時休憩の後に、朝鮮行の連絡船に乗り船底の部屋に入れられました。初めての船旅のうえに、船底部には異様な悪臭が充満していて、眠ることもならず苦しみ抜いての二泊でした。やっこの思いで清津に上陸し、今度は汽車の旅となりました。

清津から羅新へ向かう車窓からの眺めは、故郷の山々の緑溢れる風景とは全然違って、赤土のはげ山ばかりが続いていました。目に入る町々の看板には朝鮮文字ばかりが書いてあり、何が何だか分からず、やはり異郷に來たのだということをしみじみと実感しました。

朝満国境を越えていよいよ満州国に入り満鉄列車と

なりましたが、今までの線路と異なり広軌で車両幅も広く、初めてゆったりとした気分になりました。

しばらく汽車の旅を楽しんでいるうちに、通興駅に着き汽車から降りて満州の土を踏みました。お迎へのマーチョ（馬車）に乗り、土ぼこりの道を上下左右に揺られながら、やつとのもので目的地の九道溝に着きました。そのときには心身共にぐったりしてしまいました。

地平線のかなたから真っ赤な太陽が昇るころには、朝の点呼が始まり、その後朝食を済ますとすぐに草刈り作業でした。鎌など持ったこともない私には大変な大仕事でしたが、昼間は一日いっぱい働きました。夜になると遠くで狼のほえる声を聞きながら九時には消灯でした。ランプを消すと真っ暗になり、窓から差し込む月の光で日記を書いたり、故郷からきた手紙を何度も何度も読み返しているうちに、眠りに入ってしまう毎日でした。そのうちにだんだんと、ネオンの街が無性に恋しくなってきました。

四月になると、勤労奉仕隊の数も増えて賑やかに

なってきました。春の声を聞くと一番先に咲き出したかれんな桜草が姿を消すころになると、付近一帯には色とりどりの花が一度に咲き出し、大自然の素晴らしき花園となりましたが、そのころには奉仕隊の生活にも慣れて、背の低い満州馬にも乗れるようになって広野を走り回りました。

満州の夏は短くて、八月の終わりごろになると冷たい秋風が立ち始めて、人々は冬を迎える準備に大わらわになりました。私も薪取りに山に入ることもありましたが、山から吹き下す強い突風に薪を背負ったまま飛ばされたこともあり、大陸の気象の急変に恐怖を覚えたこともありました。私たちが、精魂を込めて開墾し、種まき、そして草とりなどをして大事に育てた玉蜀黍を収穫して食べたときの、あのおいしさは忘れられないものがあります。

二 再度の満州行

六カ月間の勤労奉仕隊の生活もあつという間に過ぎてしまい、貴重な経験をお土産にして十月に富岡に帰りました。満州ではもう寒気が厳しくなって雪も降り

出しているのに、富岡ではまだ日だまりでは暑さを感じるような気候で、やはり遠き満州だったとしみじみと感じていました。しかし、私は満州が大好きになり、どうせ一生を過ごすのならば、あの廣大無辺の満州で生活をしたいという思いにかられて、北安警務庁の採用試験を受けて合格し、帰国して一カ月後の十二月に再び満州に渡りました。

仕事は警務庁の電話交換の仕事で、慣れるまでは随分と苦勞をしました。深夜に呼び出しベルが鳴り、もしも居眠りでもしていて応対がちよつとでも遅れると、たちまち上司から「応答遅し」としかられるはめになります。眠たくなると窓を開けて寒気を入れていましたが、そのときに見た北安の空の北極星は目にしみるように美しいものでした。その美しさは今になっても、目の底に焼き付いていて忘れられません。今でも夜空に星を見ているとすぐに、その当時のことを思い出します。

そのうちに北安での生活にも慣れ、交換業務にも習熟して、毎日の生活にも落ち着きが出て楽しくなり、

ここが大変に好きになり、自分ここから動きたくないような気持ちになりましたが、それもゆかなくなりました。

昭和二十年八月十五日、薄々と感じていた敗戦が現実のこととなりました。その日は官舎で休んでいましたが、正午に重大発表があるので聞くようにとの達しがあり、ラジオのスイッチを入れていました。あまりはっきりとは聞き取れませんでした。天皇陛下の玉音で戦争終結のお言葉でした。「耐え難きを耐え……」というところは分かりました。

「あれはいんちぎだ。デマだ。うそだ」と叫んでいる人もいました。それもそうでしょう、勝利の日までと頑張つて今日までできたのですから。

それを思うと自然に涙が流れてきて止まりませんでした。それからは悔しい毎日を過ごすようになりました。警務庁には、血染めで「必勝」と書いた鉢巻きをして八月二十日まで出勤しました。

そのころになると、交換台のランプに明かりが付き応答すると、「ハロー、ハロー」という声が入ってく

るようになりました。その電話の様子から、ソ連軍が進駐してくることを知りました。

とうとうその日がきました。私たちは表玄関に全員集合して、男女別のグループに分けられて整列させられ、その前を白旗を掲げて警務庁長が出て行きました。その姿は目に焼き付いています。整列している人たちの中から泣き声が聞こえ始め、それがだんだんと波紋のように広がっていきました。私も泣き出し、同時に涙がこらえきれずに流れてきました。今日までのいろいろなことが思い出されて感無量なるものがありました。

やがて私たち女子は、官吏会館で休んでいるようにと言われて会館に集まりましたが、これが最後か、いずれソ連軍の自由にされるのだろうと、不安な気持ちでいっぱいでした。夜になっても何も食べれずに、不安と空腹でまんじりともせず、一夜を明かしました。翌日になってソ連兵に発見されないようにということ、官舎に戻ることとなりました。

しかし、そこにもソ連兵が肩から銃を下げて歩いて

見回りをしていましたが、そのすきをぬって走って官舎の敷地内に逃げ込みました。大した距離でもないのにひどく疲れて、体がぐったりとしてしまいました。

三 避難行の第一歩

北安警務庁の警防科の方から、「若い娘さんが集団でここにおいては危険だから、各家庭に分散した方がいい」とのことで、所持持ちの官舎に、二、三人ずつお世話になることとなりました。

明日の朝には、それぞれの受け入れ家庭に分かれるという日の夜に、お別れ会を実施しました。官舎にあった食べ物を全部出して、最後のおしゃべりをしながら夜の更けるまで語り明かしました。「これで当分お別れね」「これからどんな運命が待っているのかしら」「運を天に任せるしか、致し方ないわね」「もう一生、会えなくなるのではないかしら」などと悲観的な話ばかりで、涙を交えながらのお別れ会でした。

その時、「どしん、どしん」と、銃で戸や床をたたきながらソ連兵が入ってきました。その瞬間、体がかたがたと震え出してきました。ソ連兵は何を言ってい

るのか、さっぱり話が通じないので、余計に体が言うことを聞かなくなっていました。

そのうちに、少し気持ちが落ち着いてくると、彼らは「全員、立て」と言っているらしいことが薄々と分かってきました。何人ここにいるのかを数えたかったようです。ソ連兵は、一人一人に指さして数え始めました。このすきに逃げ出そうとしましたが、まだ足がたがたして動けないのです。そんな状態でソ連兵の動きを見ていましたが、どうも危害を加える様子はなさそうなので、だんだんと落ち着きを取り戻しました。

ソ連兵は、「時計は無いのか?」と、ジェスチャーを交えながら要求をしていましたが、その場では持っている人がいなかったのです、こちらも身振り手振りです。「無い」と答えました。すると今度は押し入れの中を探し始め、派手なスカーフや大事に持っていた帯揚げなどを取り出して、「ダワイ、ダワイ、ハラシヨ、ハラシヨ」と喜んで持つて行きました。

何事もなかったのでほっとして、みんなで顔を見合

わせて笑い出しました。だけれど、「またソ連兵が来るかもしれない。ここには危ないから今夜のうちにここを出ましよう」と言いだし、みんなはすぐに賛成して、二人、三人と分れて、あらかじめ決められていた家に逃げ出しました。

途中の道路上には、やはりソ連兵が数人ずつグループになって銃を持って歩いていましたが、そこを見付からないように走るので、命の縮む思いでした。

その後、何回か私たちは、それぞれ残しておいた荷物を取りに官舎に戻りましたが、玄関のドアはくぎ付けされていて入れないので、やむなく部屋の窓から入り込んで、残っている荷物をまとめては窓からまず荷物をほうり出し、そして窓を飛び越して外に出て、荷物をわしづかみにして一目散に走りました。

ついこの間まで寝起きをしていた部屋に入っても、猫の子一匹いない森閑とした様で何かしら薄気味悪い気もしてきました。これから先どうなるのかと思うと、部屋の中で気が抜けたようになってへたっていました。そんなことを数日繰り返していましたが、

ある日、私がいつも使っていた毛布に何か包まれていて、それにおびただしい血痕が付着していました。何かしらと思いましたが、よく見る勇氣もなくそのままにしてみました。後日に聞いた話では、同じ交換台に座っていた先輩の無残な死体だったそうです。先輩は、不幸にもソ連兵に凌辱されて、その恥辱に耐えかねて、青酸カリを飲んで自ら命を絶ったそうです。先輩は、青酸カリで口中が焼けただれ喉の渇きと苦しさにも、もたえ死にしたとのことでした。

こんな有様をどうすることもできない敗戦国の女性の悲劇に、悔しさと憤りにただ涙が流れるだけでした。

心から御冥福をお祈り致しました。

私たちは、終戦と同時に「いざ!」というときに身を守るため」と言われて青酸カリを渡されてしまったので、お守りのように肌身離さずにとっていたので、先輩の死のようなことは、いつ我が身のこととなるやもしれないことでした。

私たちの組は、山形県出身の方の家にお世話になり

ました。この奥さんは私より一つ年上の方でしたが、「あなた方は、まだ娘さんよ。もしものことがあったら大変よ」と、ソ連兵が来ると私たちを風呂場に隠して、気丈夫にも、自分が直接ソ連兵と応対しておられました。自動小銃を持った、赤レンガのような顔をしたソ連兵が入ってくると、「早く、早く、隠れなさい」と手で合図をして、私たちは急いで風呂桶の中に入りふたをして息を殺していました。

ご主人が、「勘弁してください。勘弁してください」と、哀願している声が聞こえてきます。今度は、「あなた! ソ連兵が撃つと言っているわ。殺すって言っているわ。どうしたらいいの」と、奥さんの涙声の悲鳴が聞こえてきました。私たちは首を縮めました。その後、ちょっと静かになったと思ったら、ソ連兵は荒々しく靴音を響かせて出て行った様子でした。すぐに奥さんは風呂場に来て、「もう大丈夫よ。出てきなさい」と、声をかけてくださいました。

「今ねソ連兵にトイレに入れられてモンペを脱げと脅かされたのよ。そこで大声で泣きわめいたら、私の

声の大きいのに驚いて、何もせずに出て行ったわ！」と、何ごとも無かったような態度で話されました。だけれども、我が身が一番大事なのに、私たちのために危険な思いまでしてくださったことは、感謝のほかないことでした。

このような、危険と隣り合わせの生活が九月中旬まで続きました。

四 新京での避難生活

警務庁から、新京に避難するようにとの連絡がありましたので、シートでリュックサックを作り荷物をまとめ、必要最小限の衣類と当座の食糧を詰めて、移動する準備をしました。半年分の俸給も頂いたので、上衣のそでやモンベのすそに縫い込みました。

出発の日の明け方、ガラスの割れる音にびっくりして飛び起きてみると、窓から石やレンガや棒切れなどが飛び込んできました。ご主人が、「シヨマという匪賊の襲撃だ。早く逃げろ」と、叫んでおられました。裏窓から荷物を放り投げて飛び出し、裏道を伝って組長さんのいる家に行きましたが、声は聞こえても思う

ように足が進まずにいらしていました。やっとの思いで組長さんのいる家の風呂場の窓から入ることができ、そこで息を殺して夜の明けるのを待ちました。

太陽が昇り明るくなったところに、静かになったので家に戻って見ましたら、家の中は荒らされ放題で、畳表までではぎ取られていました。こんなに恐ろしいことは二度と味わいたくないという思いを残して、この家に別れを告げました。

荷物を背負って新京行きが無蓋貨車に乗り込みました。擦れ違う列車もみんな無蓋車でした。

お国のために必死になって戦った兵隊さんたちも、北に向かって行きました。私たちに、「元気で日本に帰れよ！」「元気でなあ」と、励ましの声をかけながら遠ざかって行きました。なにかしら寂しい気持ちに襲われたものでした。

途中で列車に乗り込んできたソ連兵に、時計や万年筆などを強奪されながら新京に着き、新京の学校に収容されました。学校では全員を収容しきれず、私たちは陸軍の兵舎に入りました。

荒涼とした兵舎にやっと落ち着き、ここで新しい生活が始まりました。

多少のお金は持っけていても買物に外に出ることもできずに、難民救済事務所から配給されるのはお茶のみでした。ときたま煮炊きを要する物が配給されたら、「鉄兜」が釜の代用となり急造のカマドで、燃える物は何でも燃やして調理しました。無い無いづくしの生活は本当に容易ではありませんでしたが、それでも北満よりも少しは治安状態が良かったので安心していました。

ある日のこと、全般に落ち着きを取り戻してきたと思つたので、友人とマーケットに買物に出掛けました。すると塀のかけからソ連軍の将校が現れて、私を呼び止めました。そのソ連兵は日本語で、「あなたのホテルはどこですか。あなたの名前も教えてください」と聞くので、私は体が震えながら、「あっちの方です」と教えたなら何もせずに行ってしまうました。私は、ほっとしたとたんに膝ががくがくいていました。友人が戻ってきて、「何もされなくてよかったです

ね。私は恐くて逃げてしまったりして、ごめんね」と言っていました。

燃料不足もあって、風呂には一カ月以上も入っていないし、そのうえに、兵舎で雑魚寝の毎日なので、虱が多発し、来襲してくるのには随分と悩まされました。夜になって虱の付いた衣類を外に出しておく、寒さで虱は凍死してしまうので、毎夜、こうして虱退治をしていました。栄養失調から体に抵抗力が無くなってるので、発疹チフスが流行して、多くの人が飢えと、寒さと、下痢と、高熱のために死んでいきました。

死者も、夜に外に置いておくと、翌朝にはかちんかちんに凍りついてしまいます。それを荷車に積めるだけ積んで、墓地の穴に投げ込んで叩きました。土をかけることもできないので、ただ積み上げるだけで、誠に地獄絵さながらの悲惨な光景でした。

元軍医さんの家族の方も、過労と栄養失調が原因で結核にかかってしまいました。私はその方の衣類を未消毒のまま、凍りつくような冷たい水で洗ってあげ

ました。同じ日本人同士なのだからと頑張りました。そのかいがあったのでしょうか、そのうちに少しずつ快方に向かわれました。

しかし、今度は私が高熱を出してひどい下痢になり、脳天を打ち砕かれるのかと思うような痛みに苦しみました。お医者さんは友人に、「もう彼女は助からないから、好きな物を食べさせなさい」と言われたそうです。十二月二十五日ごろから意識不明の重体となりましたが、友人の手厚い看病によって、赤い高粱に岩塩の入った味付けのお粥が食べられるようになりました。三月ごろまでは、はっきりしない体調でした。病床で横たわっていると、遠い故郷のことが思い出されて涙が出ました。

看病をしてくれた友人も、次々と病に倒れてしまい、私はまだ病人でありながら交代で看病をしなければならなくなってしまいました。

若い男の人は、ソ連軍の使役に駆り出されています。た。

難民事務所から連絡があって、「早く日本に帰すよ

うにするから、看護婦としてあるところに行ってくれないか」という話でした。優先的に帰国させてくれるのならばと、あまり深く考えないで友人と二人で、「希望します」と返事をしました。このことを知った元航空兵だった人が私に、「お前たちは看護婦で行くのか、それとも慰安婦で行くのか。よくよく考えろ！」と注意をしてくれましたので、私たちもびっくりしてしまい、浅はかな考えで返答したことを後悔しました。二人で急いで難民事務所に駆け込み断りをしました。すると係の人は、「それは困る。もう話は済んでいる。どうしても嫌ならば、しばらくこの収容所から姿を消してもらいたい。見付かると銃殺される」と申し渡されて、びっくりしましたが、もう、どうしようもなく、あてもなく収容所を出ることにしました。

北安で渡された給料も使い果たしていたので、何か仕事をしてお金を作らなければということで、煙草売りを始めました。街角に立って、「煙草はいりませんか。煙草を買ってください」と、声をからして一日中

売り歩きましたが、あまり売れません。次に、赤ちやうちんの下がった店に、皿洗いに雇われて働いていましたが、ある夜、満人が二人店に入ってきて、「あなたたち、いくらで働いているのか。私の店にukればもっとたくさん払うよ。ジャングイにも話してあるから」と言いました。日本に帰るまでは、何としても生き抜かなければならない私たちは、お金につられて二人の満人に付いて行きました。

かつては病院だったという建物の門を入ると、満人は一緒にきた友人に、「あなたは帰りなさい」と言ったので、びっくりして顔を見合わせて、日本語交じりの満語で、「私たちは姉妹と同じで、どこに行くにも一緒。一緒に雇わなければ帰る。二人一緒ならば給料は少しぐらい安くてもよい」と、頼みました。その満人は話しているときも、拳銃を取り出して磨いたり、壁に向かって撃つまねをしたりしていました。私たちは、恐怖心でいっぱいでした。何事も起きないようにと、心の中で神仏に祈りました。

そのうちに、顔を半分隠している人、マスクをした

りサングラスをかけている人たちが集まってきました。数時間たったころ、二人の満人が手錠をかけた日本人と朝鮮人らしい二人を連れてきて、薬剤室らしい所に押し込みました。食べ物も与えていないようでした。私たちは翌朝から炊事仕事をさせられました。

だんだんと様子が分かりかけてきました。私たちを連れてきたのは、隊長と副隊長のようでした。「女たちは強情でなかなか白状しない。たたけば泣き出すし、始末が悪いよ」などと話し合っていました。八人の満人は私有財産を略奪する強盗団のようでした。

隊長は、「お前たちには、絶対に変なことはしないから安心してくれ。明日は宝物や、貴重な毛布などがどっさりと入る。他の人より一足先に日本に帰すようにするから」とも言っていました。

私たちは、もう逃げることは不可能だと悟り、後は運命に任せるしかないとひそかに覚悟を決めて、炊事の仕事を続けました。私たちは、恐ろしい満人たちのいる隣の部屋で寝起きをしていました。どこで奪ってきたのか、収容所の毛布とは異なり、ふっくらとした

布団で、何もかも忘れて眠ってしまいました。

ある日、「これを預かっておいてくれ。これは命より大事な品物だ。失くしたらお前の首をとる」と言われて包みを渡しましたが、私も思わず首を縮めました。

その夜、やっと眠りについたころ、鍵を掛けて固くドアを閉めていたのにだれかが入ってきたので、驚きの声を出すとその人影は消えました。副隊長が合鍵を使って忍び込んだことを後日に知りました。

翌日、朝食を作っていました。いつもならば準備が終わるころには食堂に姿を見せる隊員たちが、今朝に限って出てこないで、不思議だなあと思い食堂の戸を強くだたいて知らせましたが、それでもこないで隊長室に知らせに行き部屋の中を見てびっくりしました。部屋は、もぬけの殻になっていました。昨夜預かった物とは、部屋に戻って捜しましたが、見当たりませんでした。昨日まで私たちの炊事の世話をしてくれていた満人が一人残っていたので聞いたら、昨夜のことを話しながら、「彼らは八路軍で、国府軍が攻めてくるというので夜中にどこかに逃げたのだ」と説明

して、自分の持っている身分証明書を私たちに見せました。私たちはそれをみて飛び上がらんばかりに驚きました。その身分証明書には、「国府軍兵士」と書いてありました。

「あなたたちは、八路軍とは知らずにここにきたのでしょう。国府軍がきてもここは使用するの、このままここで働けるように話してあげますよ。それからこれは隊長から預かった給料です」と言っていて、私たちに軍票を渡してくれました。軍票を受け取った私たちは、これ以上両軍にはかかわりたくないと思い、逃げる決心をしました。

炊事場から米、野菜などの食品をバケツいっぱいに入れ、布団を一枚ずつ背負って収容所に戻りました。

難民収容所の人は、温かく迎え入れてくれると思っていました。が、「なぜ、こんなに早く戻ってきたのか？ まだ問題は解決してないので、姿を見せないように」と言われましたので、二人で二キロメートル先にある陸軍病院の外科病棟に行き、持ってきた布団

で寝起きを始めました。

数日たったころ、満系の隊長から包帯交換の仕事を手伝うように指示され、腕を負傷した中国人の兵隊の包帯巻きをしました。そのときは、私もかつては従軍看護婦になりたいと思ったこともあったので、あまり気にもならずにいましたが、現実には、ざくろのように割れた傷口や、うじがうようよしている傷口を見ると、吐き気を催し洗面所に駆け込む始末でした。回診が終わるころに病室に戻ると、隊長から「あなたは包帯巻きが苦痛らしいから、もう帰ってもよいです」と、言われてしまいました。私も、こんな生活は長く続けられないと思って、友人と相談して無理してでも収容所に戻ることにしました。

しかし、いつまたソ連兵に狩り出されるかも分からず、毎日が不安でしたので、職探しを始めました。

五 満人の家に住み込む

友人と別れて、一人で満人の家に手伝いに入りました。場所は、新京郊外の東三馬路で日本人のいない満人街の一軒の棺桶屋でした。「日本人はかわいそうだ

ね。自分は終戦前には日本人との交流も多くあったので、今の日本人の気持ちもよく分かるよ。だから乱暴はしないから安心して働いておくれ」と、優しく言ってくれました。地獄で仏に会ったような気持ちになり感謝しました。

平穏な毎日が続ぎ、仕事にも慣れて今までになかった楽しい日々でした。夜、疲れ果てて布団に入ると、今までのことが走馬灯のように頭を横切り、憧れの奉仕隊員として最初の渡満、希望に満ち満ちた再度の渡満、そして敗戦、それから身を守るためにいろいろな危険な場面をなんとか逃れて今日までできたことなど、次々と思い出して涙が流れました。お国のためにと思ったことが、苦勞を求めたような結果になってしまいました。そう思いながら、奉仕隊のときにみんなで歌った数え歌を、一人で口ずさんでいました。

一つとせ、人に知られた開拓の、奉仕隊の生活楽しいね。

二つとせ、ふた親離れてきたからは、半年たたねば帰れない。

三つとせ、皆さん僕らは大和魂、開拓虫なんか恐れ
ない。

四つとせ、夜の夜中に呼んでくる。非常呼集の銃を
とる。

五つとせ、いも飯、コーリャン大豆めし、慣れない
お腹じゃ下痢もする。

六つとせ、向こうを通る満鉄に、乗って帰りたい故
郷へ。

七つとせ、なぜなぜ泣くのなぜ泣くの、お家のこと
なら構わない。

八つとせ、山に行くとき気を付けた、狼、熊にワシ
もいる。

九つとせ、ここで死んだらどうするの、弥栄神社の
門の前。

十とせや、とうとう半年たちました、部落の皆さん
さようなら。

明日も平穏であってほしいと祈る毎日でした。

しばらくたったある日、奥さんから呼ばれて、「他の者の目につくから服を着替えなさい」と、手まねで

満人服を渡されました。ご主人も奥さんも、日本語をあまりしゃべりません。私は、満語を覚えようと一生懸命に努力はしていましたが、満人とはすべて日本語で通じてしまうので、なかなか覚えられません。近所の子供たちが、「フンエン、フンエン」と言って遊びに来ますが、最初は何のことかと思っていました。奥さんが、「豊子（昔は豊子という名前でした）」と言うと、発音によっては気違いという意味にとられるから、豊英という名にした方がよいのではないか」と言われました。「フンエン」というのは豊英のことで、それで私も納得して返事をするようになりました。

子供たちは毎日遊びにきていたので、私は髪の手入れをしたり、日本語を教えたりしていました。そのうちに片言ながら「満州娘」の歌を日本語で歌うようになりましたが、私の満語は最後まで進歩しませんでした。料理の方もあまり上手にならず、「餃子」を作っても上手にできず、奥さんも、「駄目だ」といわんばかりに笑って見ているだけでした。奥さんの料理を習いながら、いろいろと話を聞きました。

奥さんは、七歳のときから足の指を全部内側に曲げられて、布でぐるぐる巻きにして歩くことが困難にさせられていました。上から見ると、ちょうど足が三角形に見えました。どうしてこんなにむごいことをするのかと聞きましたが、教えてくれませんでした。

こんな平和な日も、そう長く続きませんでした。国共内戦が続いていて、八路军が侵攻して来るから外出はしないようにとの連絡があり、そのうちに激しい銃撃戦が始まり、流れ弾が飛んで来るようになりまして。レンガ壁がばらばらと落ちて、思わず身を硬くしてしまいました。どこから飛んで来るのか分からないので余計に恐ろしいことでした。

奥さんに、「もしも八路军に捕まったら、私は中国人で台湾生まれ、台湾で育ったので中国語は話せない。名前は周豊英と言いなさい」と教えられました。が、しかし恐怖の中では奥さんの言葉の意味がよく分かりませんでした。そのうちに八路军が、一軒一軒調べ始めました。日本娘であることはすぐに分かっただらしいと、奥さんが後で話していました。満服を着てい

ても、一言も話をしなかったからかと奥さんに聞いたら、「日本人が満人を見てすぐに分かるように、満人も日本人を見るとすぐに分かるものよ」と話された。激しい銃撃戦は一日で終わり、その後はまた、もとの平穏な日々が続き、周囲の人とも一層仲よくなり、命の危険を忘れるような毎日となりました。

日本に帰りたい気持ちには、一日たりとも忘れてはいませんでした。引揚げの話がぼちぼちと人々の口にもぼり出したとき、奥さんは、「帰らなくてもいいのよ。日本に帰っても、家も食べ物も着る物も無いのにどうするの。親兄弟もどうなっているか分からないのに、どうして生きていくの。そのうえに、アメリカの大きな爆弾で焼け野原になり草も生えないというではないか?」と、真剣になって引き止めました。国境や人種を超える人間愛に、流れる涙でどうすることもできませんでした。そして、「あなたがどうしても帰りたいのなら仕方がないが、必ず手紙はくださいね。こちらに來たいときは、いつでも来てね。待っているわ」とも言ってくださいました。こんなに温かい言葉で言

われると、帰国したいという気持ちもぐらつきだしました。

しかし、一日も忘れられない故郷や、別れるときに手を握り涙してくれた親友の顔を思い出すと、やはりどうしても帰ろうという気持ちは固いものでした。

引揚げの話が具体的になったので、皆さんと別れて収容所に戻りました。今度は帰国が近かったため、収容所でも快く迎えてもらいました。

六 引揚げ開始

引揚げの順番が決まるころ、持ち物についての注意があり、「持って帰れるお金は一人千円のみで、金・銀などの貴金属は没収する。もし隠して持っていることが分かったら、その人の所属するグループは引揚げさせない」という強い指導がありました。私たち一般難民は、その日その日の生活にも困っていたので、金・銀などはまったく関係のない話で、「持っている人は大変ね、隠していれば全員帰れなくなるのだから」と、ひがみ気分で話し合っていました。「元気で帰れば、それだけで十分よ」とは、みんなの気持ち

でした。

間もなく、避難民の動きが少しずつ始まりました。最初は、北満から苦勞に苦勞をしてやっと新京にたどり着いた人たちからでした。「私たちは何番目かしら。早く帰りたいわね」と、引揚げが目の前に現実のこととなると、一日も早くという気持ちでいっぱいでした。日に日に気持ちが高ぶってき、全財産の入ったリュックサックを、何度も調べては背負ってみる日が続きました。そんな日が何日か続くとだんだんと気持ちが高ぶってきて、「早く帰りたい。いつまでこの収容所に入れておくつもりなの？」と、言い出す人が多くなってきました。

あっちこちに働きに出ていた友人たちも戻ってきて、収容所はにぎやかになってきました。どの人の顔を見ても、働きに出るときの顔とは雲泥の差で、明るいよい顔になっていました。いよいよ私たちの収容所も出発の日がやってきました。こんな収容所は早く出たいという気持ちと、周一家との出会いのあったことを思い合わせると、複雑な気持ちになりました。

班ごとに集結し、小、中、大隊の編成をとり、四列縦隊となって市街地を通り駅に向かいました。最後が見えないくらいの長い列でした。背負っているリュックサックには詰められるだけの物を詰め、子供を前に縛りつけ両手にも荷物を持つての行進ですから、早く歩けずにだんだんと遅れる人が出てきます。班長は大忙しで、「前の人に続いて、遅れないように歩いてください」と、前後を走り回って注意していました。私たち独身の女性は荷物も少ないので、遅れる子供の手を引いて歩きました。やっと新京駅の広場に集結しました。

列車は無蓋貨車で少し詰め状態です。座つても足を伸ばすことができませんでした。それでも帰れるのだという一心で、文句を言う人はいませんでした。満鉄の無蓋車は、車高が高いので乗るのに苦勞でした。

機関車も、重い貨車を引っ張るので力があるのか、「ガチャン、ガチャン」と揺れて、その衝撃はすごく、子供たちは音と恐ろしさに母親にしがみついて泣き出

す始末でした。途中で幾度となく列車は止まり、その都度中国兵と本部の人が話し合いをして何かを渡していました。最終的には葫蘆島に到着しました。

久し振りに潮の香りをかぎ、この海が日本に続いているのだと思い、つい手を海につけてしまいました。葫蘆島収容所で中国側の検査を受けるため数日滞在して、やっと引揚船に乗船できました。幾段にも造られた船室に中腰になって入り、荷物を枕がわりにして寝ることとなりましたが、その船室の独特の臭気にはいささか閉口しました。

渡満するときの、新潟から乗った船での苦しみを思い出しましたが、臭いのことを除けば今回の航海の方が楽でした。食事もあまりのどを通らず、お茶だけ飲んで早々に横になりました。「今、何時ごろかしら」と思っても、だれも時計などは持っていないので分かりません。船が波を切る音しか耳に入らず、そのうちに疲れと安心感から眠ってしまいました。

がやがやする人声で目が覚めると、もうほとんどの人が目覚めていて、しゃべっていました。まだ薄暗い

デッキに出てみると、船は白波をたてながら順調に走っていました。そのうちにだれかが、「あれ、島ではないか?」と指さしたので、私もその方向を見ましたが、かすかに陸らしい物が見えました。「日本ですかね」「日本かも知れない」と、人々は話し合っていました。船員さんに聞いたら、「あれは朝鮮で、日本はまだまだ」と言われて、みんなはがっかりして黙ってしまいました。

葫蘆島を出発して三日目の朝に、待望していた博多港外に着きました。しかし、そこからなかなか動く気配がなく、人々はまた、いら立ってきました。間もなく、「コレラの疑似患者が出たので、下船は指示があるまで延期する」という連絡が入り、みんなはがっかりしてしまい、荷物を持ったまま座り込んでしまいました。いつ解除されるのか、毎朝毎晩、心待ちにしていました。五日待っても何の音さたもなく、やっと内地の土が踏めると思っていたのに、無念残念であきらめきれない気持ちでいっぱいでした。「内地の土を、放ってくれ!」と、大声を出している人もいました。

いらいらとした毎日でしたが、一週間目にやっと下船命令が出て、船は博多港に接岸しました。生きて内地の土を踏めた喜びは、筆舌に尽くせません。お国のためにと勇んで出発したときの新潟港での土も、今こうして敗戦国民として幾多の苦労を重ねて九死に一生を得て博多港の土を踏んでも、土には変わりありませんが、精神的、肉体的には天と地の差、否それ以上で何にも例えようもないほどの差がありました。

多くの先輩、同僚が死んで、私がこうして日本に再び戻ることができたのは、私の運命だけではなく、満州で亡くなった人々のご加護があつてのことと思うと、静かに祈る心でいっぱいでした。

検疫、消毒、そして入国手続きなどを全部済ませて、やっと博多の街に出ました。「ここは本当に、日本なのだ」と思うと、一筋の涙が流れ落ちました。

我が故郷はどうなっているのかとはやる気持ちを押しさえながら、博多から汽車に乗りました。引揚げのときは無蓋貨車しか乗れなかったのに、日本に帰ると客車に乗れたということで、祖国のありがたさをしみじ

みと感じているうちに、汽車はどんどん故郷、高岡に向かつて走り続けていました。途中で弁当の差し入れなどの温かい人情に接しながら、やっとの思いで、昭和二十一年八月、高岡の駅に降り立ちました。

早いものでそれから半世紀。今、世の中はまさに平和と繁栄の坩堝くわぼの中。昔のことを語る人も少なくない、あの労苦は忘れ去られつつあります。こんな時代を経て今日の平和があるのだということ、せめて知ってもらいたいものと思う一念で、駄文ですが書きました。

戦争と女の悲劇

東京都 阿久津 カツ

一 お見合いと結婚

関東地方の北部に横たわる那須連峰が分水嶺となつて、福島県側と栃木県側とに分かれて流れ落ちる水の

恵みによって、肥沃な関東平野の農村地帯が形成されています。

その那須の麓に、私の故郷、河内郡金田村がありました。

昭和十九（一九四四）年三月、そのころ大東亜戦争はますます激しさを増し、村の若者は次々と戦場に駆り出されて、村には老人、女、子供の姿しか見られないうようになってきました。私は教師をしていましたが、初めて男性とお見合いをすることとなりました。その話は一月の終わりがらから始まっていたのです。

隣町で古着売りを商売にしている六十歳近い年のおばさんが話を持ってきたのです。この人は、仲人をするにこと五十数回のベテランだったのです。

戦時中は新しい衣料を手に入れることはほとんどできず、古着が大変に重宝がられたものです。農家でも着物を手に入れるために米と交換したくらいです。

その日も母に、若い女物の着物を見せていたのですが、私の姿を見て、「よい縁談があるんだが。お嫁に出しませんか」と、商売をそっちのけにして、仲人の